

# 宮崎県立看護大学大学院看護学研究科 平成24年度修士論文要旨

## 患者が主体的に治療過程を歩めるように 支える看護

### —認識が定まらない状況の患者 への看護過程を分析して—

前田慶太（基礎看護学）

【キーワード】 治療過程, 患者, 主体性, 認識,  
看護過程

本研究の目的は、治療過程において患者の認識が定まらない状況とその変化の特徴及び患者の変化に影響を与えた看護者の認識と表現の特徴を明らかにすることである。

研究対象は治療過程において認識が定まらない状況から主体的に取り組みだしたと思われた患者への自己の看護過程11事例13場面である。

研究方法は全場面の看護過程を再構成し、各看護場面の意味を取り出し、場面毎に「患者の認識が定まらない状況とその変化」と「患者の変化に影響を与えた看護者の認識と表現の特徴」を明らかにした。それらの共通性と相異性を吟味し、「患者の認識が定まらない状況とその変化の特徴」と「患者の変化に影響を与えた看護者の認識と表現の特徴」を明らかにした。

〈患者の認識が定まらない状況とその変化の特徴〉

- ・治療の限界を感じて気持ちが揺れていたが、自分の力が働いていることに気づき気持ちが定まった。
- ・体におこる変化のプロセスや内部構造が適切に描けないために生じた不安や判断が回復過程を妨げていたが、体の状態が描け、自分の力を生かしていこうという気持ちになった。
- ・可能になったリハビリやケアをかたくなに拒否していたが、より良い状態を願う看護者に身をゆだね、回復を実感すると自ら取り組み始めた。
- ・治療が長期化する中で自分の思いを表現することを

ためらっていたが、思いを表現したことで問題解決の糸口が見え安堵した。

〈患者の変化に影響を与えた看護者の認識と表現の特徴〉

- ・リハビリやケアが滞ったとき、治療の長期化や変更や新たな症状の出現で認識が定まらない状況と予測したとき、関わりの中で認識が定まらない状況と予測したときには、患者の認識を知ろうと関わりを深める。
- ・関わりの中で得られた患者の表現と全体像を重ねて、患者の現状に対する認識を予想しながらまずはありのままの状態を受け入れる。
- ・患者が治療の限界を感じて気持ちが定まらない状況のときには、生命力の幅が小さくなった状態でも働いている患者の力を看護者が見だし、患者が気づき、さらに意識出来るよう関わる。
- ・体におこる変化のプロセスが描けないことにより生じた患者の認識が回復過程を妨げているときには、患者がどのように理解しているかを確認し、受け止めた上で、回復過程をイメージ出来るように伝える。
- ・患者が必要なりハビリやケアをかたくなに受け入れないときには、より良い状態を願う看護者の思いを表現し、生活過程の中から感情を変化させる新たな刺激を見だし、患者にとって快い体験になるよう関わる。
- ・社会関係の中で生じた問題のために認識が定まらないときには、患者と支え手が思いを互いに表現した上で調和的に解決するための方向性を探る。
- ・関わりの中で患者の変化を感じ取り、認識が整ったか見定め、患者が自身の力に気づき、より健康な状態に近づくことを共に望み支える。
- ・チームメンバーに患者の認識の在り様を伝え共有し、関わりの方向性やケアの方法を共有する。